

福島の待望！ 2017 インハイ

初のインハイへ挑む清瀬高。東京都の公立校がインターハイに出場するのは、1957年の(都立)大泉以来60年ぶり



「明るく、楽しく、元気よく」——これが都立清瀬高ソフトテニス部のモットーだ。

歓喜の涙を見せた予選から約3週間後、初出場のインハイに向け、連日力が入った練習が行われていてもおかしくないのは

ずだが、そこは都立高だ。期末試験の真っ只中——部活動は2週間の休止期間に入っており、本誌取材のためチームは特別に1時間の練習を行った。

久々の練習に、息がいつもより早く上がる。それでもコート上の選手たちの声

“楽しさ”の本当の意味を知って、 初の大舞台へ

東京予選で公立校として60年ぶりのインハイ出場を決めた清瀬高校。

19年間指導を行い、チームを作った渡辺常雄監督から、同校出身の28歳・矢島総一監督がバトンを引き継いで2年目。「明るく、楽しく、元気よく」をモットーに掲げる、この都立高の飛躍の理由を探った。

文●田辺由紀子 写真●井出秀人

は明るい。この夏、初めての猛暑日。体力を心配し、矢島総一監督が休憩の合図を送っても、多くの選手は手早く給水を済ませると、時間を惜しむようにボールを打ちにコートへ戻っていく。

そう時間がないのだ。練習は平日2時間半。ナイター設備がないため冬は1時間半もない。コート5面は公立校としては恵まれているとも言えるが、これを硬式・ソフトテニスの男女チームが共用するため、41名の男子部員たちが2面にひしめくことになる。そんな中で、選手たちが貴重な練習時間確保の術としているのが始業前の朝、そして昼休みに自主的に行っている朝練と昼練だ。参加は自由だが「これまで勝つ人たちがいるときは積極的にやっていたので、じゃあ自分も……と、3年生は8割くらいがやっている」(中内キャプテン)と、メンバーにとって欠かせないものとなっている。

ただ、これだけで彼らは強くなったわけではない。成長を促した最大の要因は、意識の変化だ。わずか半年前の冬、チームは大きな壁にぶつかっていた。昨年のレギュラーメンバーが引き続き残っていたが、なかなか勝てずに自信を持てず、「もうテニスはやめて受験勉強に力を入れようか」——選手たちの大半にそんな雰囲気漂っていたと矢島監督は振り返る。

「大会の組み合わせなどもあって、序盤で負けることが多く、どんなに『勝てる』